

## 住総研だより 第22号 (2015 (平成27) 年夏号)



7月17日に開催された住総研シンポジウム(会場:学代会館)の様子(2~3頁参照)

### 目次:

|   |    |
|---|----|
| 最近の動き   | 1  |
| 第42回<br>住総研シンポジウム                                     | 2  |
| 2015年度研究助成<br>キックオフミーティング・<br>「住総研 研究選奨」<br>表彰式・記念講演会 | 4  |
| 住総研 住まい読本<br>出版記念フォーラム                                | 6  |
| 新刊案内<br>『住まいの金融と税制』<br>『住総研レポート』2015                  | 7  |
| 市ヶ谷加賀町アパート<br>防災懇親会                                   | 8  |
| 住総研 図書室<br>「住まいの本展」<br>「図工教室」                         | 9  |
| 出版助成募集中   | 10 |
| 「住総研 博士論文賞」<br>募集中(新設)                                | 10 |
| 第43回住総研シンポジウム<br>開催告知                                 | 11 |

### 最近の動き

●平成26年度事業報告・平成27年度研究助成決定  
理事会(6月8日開催)、評議員会(6月22日開  
催)で、今年度研究助成が決定した。また、昨年度  
事業報告等が議決され、同決議に基づく公益目的  
支出計画実施報告書を内閣府へ提出した。

●キックオフミーティングおよび「住総研 研究選  
奨」表彰式・記念講演会開催

平成27年度採択の研究助成20件を対象に、6  
月25日キックオフミーティングを開催した。今年度  
より研究選奨表彰式と記念講演会は、研究者への  
好事例提示と一般公開を目的に建築会館で開催  
した。また、交流会では研究者や研究運営委員と  
の情報交換が図られた。(詳細は4~5頁参照。)

●今年度募集の研究助成重点テーマ解説について  
今年度募集の研究助成重点テーマ「住まい手か  
ら見た住宅の使用価値」について、今年度新設さ  
れた同委員会が審議され、10月から研究助成募  
集のホームページで公開される。

●住総研出版物WEB公開の許諾確認終了間近  
住総研が出版した報告書等のWEB公開につい  
て、現在ホームページ上で公告中の執筆者等への  
許諾確認は9月末を目途に電子データとして10月

から当財団ホームページで順次公開する。

●第7回住教育授業づくり助成募集終了

6月30日に募集を締切った住教育授業づくり助  
成は、7月16日の委員会で5校が選考された。9月  
からの授業で実施し、来年2月末にその結果が報  
告書として提出される。

●第42回住総研シンポジウム開催

本年度第1回目のシンポジウム『受け継がれる住  
まい』を7月17日学代会館で開催、参加者107名、  
参加費等を義捐金(81,500円)として東日本大震  
災被災地へ寄付の予定である。(詳細は2~3頁参  
照。)

●住総研図書室「住まいの本展」、「図工教室」開催

7月24日から8月31日に住総研図書室で今年度  
重点テーマに合わせ「民家」関連書籍を展示し  
た。また8月26日には図工教室を開催した。(詳細  
は9頁参照。)

●住総研 住まい読本出版・出版記念フォーラム開催

『建築女子が聞く-住まいの金融と税制』の出版  
記念フォーラムを東京と京都で開催した。(詳細は6  
頁参照。)

## 平成27年度重点テーマ:受け継がれる住まい連続シンポジウム第1回『受け継がれる住まい』

2015年7月17日（金）13：00～16：40 学士会館210号室（東京都千代田区）

司会： 祐成保志（東京大学大学院准教授）

基調講演： 内田青蔵（神奈川大学教授／住総研研究運営委員会委員長）

講師： 木村至聖（甲南女子大学准教授）

後藤治（工学院大学教授）

椎原晶子（晶地域文化研究所代表）

パネリスト： 木村至聖、後藤治、椎原晶子、光井渉（東京藝術大学教授）



祐成保志氏



内田青蔵氏



後藤治氏

本年度の住総研シンポジウムは、「受け継がれる住まい」というテーマで議論が進められる。なぜ私たちは住まいや生活、あるいは住環境や地域社会などを継承しなければならないのか、どう継承していくべきか、またその継承のシステムとはどうあるべきかなどの問題を再考し、「住宅を受け継ぐこと」が将来のより良い社会を築く一つの要素になり得るのではないかという点について検証する。7月17日に行われた第1回シンポジウムでは、継承の意味や意義、また継承の必要性について広く議論が交わされた。

はじめに、内田青蔵委員長による基調講演で、本年度の議論の方向付けが示された。まず内田氏は、明治以降の廃仏毀釈や城郭建築の破壊、明治天皇の服装、宮廷儀礼、住まいの洋風化計画などを事例に挙げ、近代化の過程において「伝統」を否定すべきものとして捉えてきた歴史を説明した。これを「近代化の歪み」として、今なお尾を引いていると指摘。古きを恥じ、捨て去ることを肯定する姿勢は、現代の日本でも優勢を保ち、「受け継ぐこと」が難しい社会であるという。しかしその反動として国として文化財を保護する手立てがはじまり、いまでは地域の文化資源として古き良き建築を使い続けようとする市民の意識は、確実に浸透している。そこで内田氏は、これからの時代への新しいスローガンとして、「『スクラップ・アンド・ビルド』から『キープ・エンド・チェンジ』へ」を提唱。これは、できる限り現在の建物を維持して使い続け（キープ）ながら、必要ならば、用途変更あるいは所有者や利用者を変え（チェンジ）ながらも使い続けること。そうした仕組みで継承を促しながら、新しい建築と古い建築が当たり前で共存する社会を目指したいと、本年度の議論を方向付けた。

### ●後藤治「文化財保護法の貢献と課題」

後藤氏は、日本における保存に関わる国の

政策と、その周縁の活用実態から「住まいの継承」についての問題点を指摘した。いま、歴史的保存活用のニーズは飛躍的に高まりつつあるという。実際に、重要文化財のみならず、伝統的建造物群保存地区（1975年制定）や登録文化財制度（1996年制定）など、いずれも制定当初の倍増ペースで登録が進んでいるという。また「歴史まちづくり法（地域の歴史的風致の維持および向上に関する法律）」（2008年制定）も実施が難しい法律ながら、現在までに49の市町村が計画を策定して取り組んでいる。この背景には、市町村、とりわけ地方自治体や地域の方々の歴史的資産活用に向けた熱い視線、積極的な行動が起因しているという。しかし、「住まいの継承」という視点に絞ってみると、国の政策的な支援は見当たらない。これからの空き家問題も重なり、古くからある普通の家をそのまま住み継ぐというもっとも当たり前のことが、もっとも難しい社会であるのが実情だ。この問題をクリアしていくためには、自治体や地域の強い意思しか対抗する道はない、と後藤氏は話す。自治体（または地域）が独自の仕組みを組み立てて、国はそれを支援していくようになればよい。また、後藤氏独自の考えとして、空き家対策として住まいの長寿命化改修費を相続時の税金から控除するという具体的な提案もあった。

### ●木村至聖「なぜ過去の遺物を保存するのか 社会学の視点から」

社会学の視点から文化遺産について研究を続ける木村氏は、端島（通称、軍艦島）の事例を挙げながら、「形のないコト」についての文化的価値について言及した。「軍艦島」は約15年前から元住民による保存運動を発端とし、この夏、明治期における一連の産業革命遺産の一つとして世界文

化遺産に登録されたばかりである。しかしこの島は、端島炭鉱の生産施設だけではなく、労働者住居や学校、娯楽施設、社寺などの生活空間が、当時の暮らしの活況をそのまま残す稀有な文化遺産でもある。しかし今回の登録では、産業を支える名もない人々の日常生活をとどめる空間は、評価されるには至らなかった。そのことから、「文化資産を評価するときのストーリーは、それがいったい誰にとってのものなのかを考える必要がある」と、木村氏は述べた。それを「文化遺産は、社会の鏡」という言葉を引用しながら、文化遺産を見る人の歴史や文化、価値観が反映されるものとして、その意義を新たに問い直す必要性があるとした。

#### ●椎原晶子「谷中界隈の伝統的建物活用保全・支援の実践」

寺町の風情を残す東京・谷中界隈で、有形無形の生活文化の保全・活用・支援をする「NPO法人 たいとう歴史都市研究会」の取り組みから、住み継ぐための実践的な仕組みや、その考え方が紹介された。台東区の谷中・上野桜木周辺は、都内でも木造家屋が密集して残るエリアである。そこで、ハードとソフトの連携を含めた生活文化の継承をすすめている。具体的に、歴史的な建物の活用で困っている所有者からNPOで借り受けて、その家の活用方法、活用者を探して継承を促すというもの。そうした方法で、明治のお屋敷、三間間口の町家、大正時代の彫刻家のアトリエ、大正時代の喫茶店などを再生・活用している。古い建物はただ残ればいいのではなく、その建物で育まれてきた暮らしの知恵、環境システム、近隣とのささやかな助け合いや、修繕のための職人ネットワークなど、それらがあってはじめて家を住み継ぐことができる、と椎原氏。住まいを単体で捉えるのではなく、まち全体を住まいとして捉えること。地域のコミュニティが育ち、安心でき、親しみのある地域をつくってこそ、住み継ぐ住まい・住み継ぐまちになっていくのだと述べた。また今後は、神田、湯島、本郷、上野など、東京の文化遺産が残るエリアと連携しながら、制度改善の提案をしていく方針であり、地域が発信する古いものを守る仕組みのあり方の展望を述べた。

#### ●ディスカッション

ディスカッションでは、文化財保護制度や古い建物を残し活用することに対する変化など、これからの可能性につながる議論が交わされた。

まず一つ目に、これまで文化財は、国が一方的に指定を行う中央集権的な制度であったが、近年は自治体が決めることに対する自由度が上がり、自治体の役割が非常に強くなってきているということ。また、自治体も地域の文化的資産を残すことに積極的で、国の政策と所有者とのあいだをつなぐ役割として重要な存在となるため、これからはやる気のある自治体を国が支援するというかたちを模索できないか。

二つ目に、文化財が希少的存在から、日常的なものに変わりつつあるということ。登録文化財の登録数増加などにより、日々の暮らしで目にするような身近なものになった。しかし、「住まい」に限ってみると、古い家をそのまま住まいとして残すような支援策はないというのが現状である。愛着のある家を残したいという人は潜在的にいるはずで、その機会を失っているということは、個人にとってだけではなく、その地域にとっても大きな損失となる。そのときにもやはり、自治体や地域住民の動きがキーとなるとした。

三つ目に、古い建物を修復するときのスタンスに、若い人を中心に感覚の変化がみられるということ。「古い建物を活用すると、どこをどう変えたかということが話題になりがち。しかし、最近はどこを変えたかよりも、どこを読みとり、どこを残したかということに重きを置くようになってきている」（椎原）。それは、箱としての機能を失った保存形式、とりわけ住まいをそこに住まう人自身が住み継いでいけるような仕組みのあり方について議論が膨らんだ。内田委員長は、「住まいを住み継ぐことは、その建築や空間の原理、またその建物がもつ魅力、作った人や、住み手の意識をどこまで読み取って残していくことができるのかにかかる」と、建物（モノ）としての保存と、生活文化（コト）の継承との両者一体となった保存のあり方が今後求められるとして、議論を第二回目シンポジウムへと繋いだ。

（文責：（有）建築思潮研究所 帳卷子）



木村至聖氏



椎原晶子氏



光井渉氏

## 2015年度研究助成キックオフミーティング・「住総研 研究選奨」表彰式・記念講演会開催



内田青蔵氏



小林茂雄氏



近藤民代氏



駒木定正氏

2015年6月25日（木）建築会館301・302号室（東京都港区）

キックオフミーティング：13:00～13:40

表彰式・記念講演会：14:00～15:30

この会は、2015年度の研究助成採択者と「住総研 研究選奨」受賞者が一堂に会し、助成研究への激励の意をこめ、「住」の研究者同士が親睦を深めることを目的としている。

また、今年度から優れた研究成果を広く多くの方に知ってもらう為、「住総研 研究選奨」表彰式および記念講演を一般に公開し、建築会館にて開催した。

はじめに、当財団専務理事道江紳一より開会の挨拶を行い、続いて、研究運営委員会委員長の内田青蔵氏（神奈川大学教授）より、本年度に採択された研究助成20件の審査経過報告がなされ、以下について述べられた。

「応募数77件の中から慎重に審議した結果、今年度の採択数は20件であった。採択率は26%となり、厳しい関門となった。昨年度

は、50件と低調であったことを考えれば今年度は、大幅な増加と云えるが、残念ながら一昨年の90件には至らなかった。応募状況を分野別にみると、「都市・地域」、「集住・住戸」が全体の60%を占め、次いで、「環境・エネルギー」、「高齢者・障がい者」、「工構法・生産」、「歴史」、「社会システム」の順となった。分野別の占める割合の差があるものの、幅広い分野の応募があったと云える。また、建築分野以外からの応募も見られ、今後も異分野からの応募も歓迎したい。」

後半の「住総研 研究選奨」表彰式及び記念講演会では、受賞論文代表者3名へ表彰状と副賞が授与された。

受賞論文(3編)は、以下の通り。

### 2015年度住総研 研究選奨 受賞論文

※研究No. 順

#### ■夜間津波からの自主避難を誘導する光環境の調査と構築

- 岩手県釜石市と陸前高田市を対象として -

主査 小林 茂雄（東京都市大学 教授）

委員 角舘 政英（ぼんぼり光環境計画株式会社 代表）

前 博之（株式会社久米設計 設備設計部）

#### ■東日本大震災の自主住宅移転再建にみる住宅復興と地域再生の課題

- 持続可能な住宅復興のかたちを展望する -

主査 近藤 民代（神戸大学大学院 准教授）

委員 柄谷 友香（名城大学 准教授）

#### ■北海道における漁家住宅の歴史・地域的特性を活かすための研究

- 歴史的漁家住宅の遺構調査にもとづくまちづくりへの関与と発展 -

主査 駒木 定正（北海道職業能力開発大学校 特任教授）

委員 小林 孝二（北海道開拓記念館 学芸員）

山之内裕一（山之内裕一建築研究所 代表）

受賞者からは受賞論文に基づく講演が行われ、研究方法や成果の他、これから研究活動をはじめめる主査に向けて研究活動の中で感じたこと等をお話頂いた。

講演後の講評は、研究運営委員会委員の田辺新一氏（早稲田大学教授）より、研究助成の発表に対する意見や提言、また、助成採択

が厳密にかつ時間をかけて行われていることや、今回採択された研究主査へ励ましの言葉を述べられた。

終了後の情報交換会では、研究運営委員や研究者同士の交流を深める貴重な機会となり、盛況のうちに閉会した。

## 2015年度 研究助成採択一覧(20件)

| テーマ   | 助成No. | 主査名   | 所属             | 主題                                  |
|-------|-------|-------|----------------|-------------------------------------|
| 重点テーマ | 1501  | 江村日奈子 | ぶなの木学舎民家研究室研究員 | 特別豪雪地帯に建つ伝統的民家の保存活用に向けた改修手法の研究      |
|       | 1502  | 遠田 敦  | 東京理科大学助教       | 主体的快適性に関する基礎的研究                     |
|       | 1503  | 貝島 桃代 | 筑波大学准教授        | 津波被災により人口流失した三陸集落の住環境の再編手法          |
|       | 1504  | 熊谷 亮平 | 東京理科大学講師       | 住商混在型木密地域におけるリノベーション構法とその集積効果       |
|       | 1505  | 田口 陽子 | 佐賀大学大学院教授      | 住宅と公共施設の複合空間における相互扶助と集客交流拠点形成       |
|       | 1506  | 野崎 淳夫 | 東北文化学園大学大学院教授  | 建築物における空間放射線量率の分布性状と建築工学的低減対策に関する研究 |
|       | 1507  | 山崎 寛恵 | 東京大学大学院博士研究員   | 子ども住環境の生態学的デザインの解明                  |
| 自由テーマ | 1508  | 阿部 俊彦 | 早稲田大学客員主任研究員   | 密集市街地の住環境改善のための事前復興GISデータベース開発      |
|       | 1509  | 大原 一興 | 横浜国立大学大学院教授    | 出づくりの村「語り部」による二拠点型居住の伝承             |
|       | 1510  | 加藤 浩司 | 有明工業高等専門学校准教授  | 歴史的市街地における新規居住者と地域の交流支援に関する研究       |
|       | 1511  | 加藤壮一郎 | ロスキレ大学客員研究員    | デンマーク・郊外集合住宅地区における社会的排除の現状とその対策     |
|       | 1512  | 税所 真也 | 東京大学大学院博士課程    | 成年後見人による住環境支援                       |
|       | 1513  | 佐久間康富 | 大阪市立大学大学院講師    | 農山村の空き家再生に地域社会が果たす役割に関する研究          |
|       | 1514  | 鈴木 敏彦 | 工学院大学教授        | アントニン&ノエミ・レーモンドのトータルデザイン            |
|       | 1515  | 鈴木 博志 | 名城大学教授         | サービス付き高齢者向け住宅の供給及び入所選択志向の実態と課題      |
|       | 1516  | 早川 典子 | 江戸東京たてももの園学芸員  | 日本における木造住宅の移築事例に関する研究               |
|       | 1517  | 安野 彰  | 文化学園大学准教授      | 大正・昭和期の都市上中流住宅における水まわり空間の変容過程       |
|       | 1518  | 矢吹 慎  | 東京大学大学院修士課程    | 戸建住宅団地における非住宅用途の発生のメカニズムに関する研究      |
|       | 1519  | 山田 崇史 | 慶應義塾大学大学院博士課程  | 避難施設を核とした災害に強い街づくりの研究               |
|       | 1520  | 吉田 千春 | 明治大学大学院博士後期課程  | 多文化の学びを育む混住型国際学生宿舎の研究               |

### ●予告

2016年度研究・実践助成の募集は2015年10月1日より開始です。詳細は以下のURLをご覧ください。

<http://www.jusoken.or.jp/josei/index.html>

## 2015年度 住総研出版助成採択一覧(3件) ※2016年度の募集については10頁をご覧ください。

4年ぶりに募集を再開した2015年度出版助成は、22件の応募の中から厳正な審査を経て、以下の3件を採択した。

| 助成No. | 著書題名             | 主査名   | 所属(申請時)    | 出版社     | 発刊時期    |
|-------|------------------|-------|------------|---------|---------|
| 1501  | 自分にあわせてまちを変えてみる力 | 饗庭 伸  | 首都大学東京准教授  | 萌文社     | 2015年9月 |
| 1502  | 戦後東京と闇市          | 石樽 督和 | 明治大学兼任講師   | 鹿島出版会   | 2016年9月 |
| 1503  | 現代日本ハウジング        | 住田 昌二 | 大阪市立大学名誉教授 | ミネルヴァ書房 | 2015年8月 |

## 住総研 住まい読本6 『建築女子が聞く 住まいの金融と税制』出版記念フォーラム



園田真理子氏

### 【東京会場】

2015年7月30日（木）18：30～20：30 AGC Studio（東京都中央区）

講師：

園田真理子（明治大学教授）

馬場未織（建築ライター）

大垣尚司（立命館大学教授／移住・住みかえ支援機構代表理事）

三木義一（青山学院大学教授／元政府税制調査会専門家委員会委員）

### 【京都会場】

2015年8月31日（月）18：00～20：00 学芸出版社会議室（京都市下京区）

講師は東京会場と同じ。



馬場未織氏



大垣尚司氏



三木義一氏

『建築女子が聞く 住まいの金融と税制』の出版を記念して、出版記念フォーラムを開催した。本書は、一般の読者を対象とした「住総研住まい読本」シリーズの第6刊として出版したものである。住み手も住宅も高齢化、高経年化している中、現代の日本の社会では、持家取得が住宅双六の上がりではなくなっている。このような、社会的背景の中、この問題をどうしたらいいのか、住まいに関わる金融や税制の基本を学ぶことをコンセプトにした。高齢者住宅研究のエキスパートであり「福祉は住まいに始まり、住まいに終わる」と唱える園田真理子氏と、平日は東京に暮らしながら、週末は房総に通う「二拠点居住」をしている馬場未織氏の建築女子2人が、金融のスペシャリストである大垣尚司氏と租税法の専門家で民主党政権下の政府税制調査会の委員を務められた三木義一氏に、金融や税制について忌憚のない質問をぶつけ、それに応えてもらうというやりとりで進められる。いわゆるハウツー本ではなく、金融や税そのものの考え方から学べる教科書的な本

である。

出版フォーラムは、聞き手の2人が質問を投げかけ、それについて4人が語り合うという方式で進められた。

家を買う場合は、借金をすることが経済的に正しいという、「住宅ローン」の経済的合理性の話題から始まり、家は資産であるという考え方がベースとなっている「帰属家賃制度」、また、高齢社会に対応べく考えられた移住・住みかえ支援機構（JTI）による「マイホーム借り上げ制度」や新しい住宅金融の仕組みとして「マイホームリース」（債務引き受け方式）が紹介された。

満員御礼の中、白熱した議論となった。建築や住まいが、いかに金融や税制と深く結びついており、社会を形成しているのか、考えさせられるフォーラムとなった。「住まいの金融と税制」については是非多くの人に読んで学んで頂ければと思う。

※書籍については次頁をご覧ください。



出版記念フォーラム（東京）の様子

## 新刊案内

### 建築女子が聞く 住まいの金融と税制(住総研 住まい読本6)



#### ■建築女子が聞く 住まいの金融と税制

著 者：大垣尚志，三木義一，園田眞理子，馬場未織

発 行 所：学芸出版社

定 価：¥2,200+税

判 型：A5判

ページ数：222頁

ISBN978-4-7615-2599-6

全国の書店または各WEB書店にてお求め下さい。

### 住総研レポート すまいろん2015(第5号)



特 集：「作られたものから作るものへ」主体形成としての住宅

定 価：¥1,400+税（送料別）

判 型：B5

ページ数：135頁

購入は、丸善出版株式会社（TEL03-3512-3256）または当財団まで。

詳細は以下のURLをご覧ください。

<http://www.jusoken.or.jp/publish/sumairon.html>

※バックナンバーも販売しております。

## 市ヶ谷加賀町アパート防災懇親会(防災懇)

賃貸集合住宅コミュニティ研究会では市ヶ谷加賀町アパートのコミュニティ形成と防災への意識向上を目的とした居住者交流会を行っている。

平成27(2015)年度の第1回目である防災体験バスツアーを8月2日に行った。18名(大人15名, 子ども3名)にご参加頂いた。

防災体験ツアーでは本所都民防災教育センター本所防災館を訪れた。体験ツアーでは「防災シアター」, 「煙体験」, 「地震体験」, 「消火体験」, 「暴風雨体験」と各コーナーで災害時の状況を模擬体験し, 対応策を学んだ。

### ●防災シアター

CGアニメーションを通して東日本大震災, 阪神淡路大震災, 関東大震災について学んだ。ストーリーに合わせて振動する座席や, 立体感のある音響システムを使用し, 子どもにも理解しやすい内容だった。

### ●煙体験(写真1)

ビル内で火災に遭遇した状況を想定し, 暗闇の煙の中, 狭い通路をいかに脱出するかを体験した。身を屈めて煙を吸わないようにすることや, 非常口への誘導マークに従って進むことを体験した。

### ●地震体験

起震装置によって震度5~7の揺れを体感した。縦揺れ横揺れ, 実際に東日本大震災時の揺れなどを再現した部屋で, 机の下で身を守る術や, 退路の確保などを学んだ。

### ●消火体験

火災現場をシミュレートした大型スクリーンに, 実際に水消火器を噴射して, 消火の仕方を体験した。火事を見つけたら, まず「火事だー」と周りに知らせること, そして, 消火器は使い切ること, そして何よりも自分の安全を第一にすることを学んだ。

### ●暴風雨体験(写真2)

雨合羽を着用し, 風速30m/秒の暴風雨を体験した。雨合羽を着けていても, 手首や首から水が入ってくるほどの強さであった。

ツアーには防災意識の高い住民が参加し, 意義のある催しになった。知識として知っていたことであっても実際に体験してみると新たな驚きや発見が得られた。緊急時でもすぐに思い出せる, 行動できると思うという意見も聞くことができた。

防災コンには参加する住民が毎回同じ顔ぶれであり, 意欲の高い住民とそうでない住民に差が生まれてしまっている。そこで今回, 防災体験ツアーの後にスカイツリー見学を行い, 参加を促そうとした。だが参加人数は2014年度の防災体験バスツアー(お台場そなエリア)から変わりなく, 今後の検討が必要である。



写真1 煙体験の様子



写真2 暴風雨体験の様子

## 住総研 図書室「住まいの本展」・「図工教室」

### ●住まいの本展

会期：2015年7月24日（金）～8月31日（月）※土日および8月10日～14日を除く

展示テーマ：民家

### ●図工教室『住みたい家をつくろう！～みんなでつくるわたしたちのまち～』

開催日：2015年8月26日（水）第1回目10:00～12:00／第2回目13:30～15:30

参加人数：36人（第1回目：18人，第2回目：18人）

住まいの本展は、2015年度の重点テーマ「受け継がれる住まい」に沿い、今回の展示テーマは“民家”とした。昔の住まいはどのようなものであったか、建物や暮らしを少しでも知って貰うために所蔵している民家の写真集等を展示した。また、近頃、古民家再生がブームになっているが、今迄に作られてきた住まいを有効活用することも課題の一つであるので、古民家再生に関する資料も展示した。その他、都内および近郊で見ることのできる民家園等も紹介し、パネル展示を行った。

### ●展示した資料リスト（一部）

| 書名                | 編著者等            | 出版者                | 出版年  |
|-------------------|-----------------|--------------------|------|
| 久保家旧宅の記録          | 世田谷区教育委員会事務局生涯学 | 世田谷区教育委員会          | 2013 |
| 日本の民家一九五五年        | 二川幸夫            | エーディーエー・エディタ・トーキョー | 2012 |
| 民家再生の実例           | 日本民家再生リサイクル協会   | 丸善                 | 2009 |
| 民家造               | 安藤邦廣            | 学芸出版社              | 2009 |
| 古民家               | 日本風景写真協会会員      | 光村推古書院             | 2005 |
| カール・ベンクス よみがえる古民家 | 柚木崎寿久ほか         | 新潟日報事業社            | 2004 |
| 民家のなりたち           | 川島宙次            | 小峰書店               | 2004 |

図工教室は主に小学生を対象に、割り箸、ストロー、ペットボトル、段ボール等、身近にある材料で家を作った。各々が家を作った後、参加者全員の作品をまちなに見立てたセットに配置し、みんなでまちを作り、記念撮影を行った。記念撮影した写真はカードのようにし、参加者に配布した。試行錯誤する子供もいたが、何とか「住みたい家」が完成し、記念撮影するときはみんな楽しそうにしていた。



参加した子供の作品の一例



完成した「まち」

## 告知

### 出版助成募集中 ※2016年1月31日締切

住関係分野における研究の発展や研究者育成の観点から、将来の「住生活の向上」に役立つ内容で、社会的要請及び学術的に質の高い研究成果や若手研究者による、未発表の出版に要する経費の一部を助成します。

#### 出版助成募集要項

- 助成対象
- ・「住生活の向上に資する」住関係分野の研究成果とし、他分野に及ぶ学際的な研究成果を含みます。
  - ・最近新たに完成した、一冊の刊行物になり得る未刊行の研究成果。
  - ・著作、翻訳を問いませんが、日本語による出版に限ります。
  - ・退官を記念に出版される論文集は、除きます。
- 応募資格
- ・個人またはグループとし、既存の団体・組織を除きます。  
(個人の所属は問いませんが、団体名及び法人名での申請は出来ません)
  - ・同一年度内は、申請者1名につき、1著作物までとします。
- 助成対象期間 2016年(平成28年)7月1日～2017年(平成29年)9月30日までの15ヶ月間
- 出版期限 助成決定通知後、15ヶ月以内の2017年(平成29年)9月30日まで
- 応募期間 2015年(平成27年)8月1日～2016年(平成28年)1月31日

詳細は、以下のURLをご覧ください。

<http://www.jusoken.or.jp/josei/publish.html>

### 「住総研 博士論文賞」募集中(新設) ※2015年9月30日必着

住関連分野における研究発展のため、若手研究者・実務家の育成及び支援を目的に、将来の「住生活の向上」に役立つ優れた博士論文を表彰します。

選考基準：住生活の向上に寄与すると考えられる論文で、次の一つ以上に該当すると判断されるものとします。

- 1) 公益性を有し、社会的要請が高い研究
- 2) 先見性に富み、将来の発展性が期待できる研究
- 3) 社会的な実用性の向上に貢献することが期待できる研究
- 4) 将来の成長が期待できる若手研究者・実務家による研究

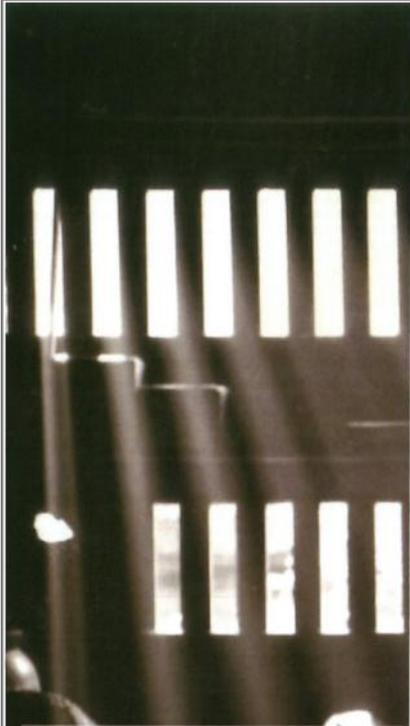
- 応募資格 住生活の向上に寄与すると考えられる論文で、下記項目すべてを満たすことが必要です。
- 1) 過去3年(2012年4月1日～2015年3月31日)の間に、博士の学位を取得した論文で、所属長もしくは指導教員の推薦があるもの。  
なお、同じ指導教員の指導の下で行われた博士論文の応募は1編のみとします。
  - 2) 申請研究者は、40歳以下の方(申請時)。
  - 3) 住総研 博士論文賞の募集に初めて応募するもの。
  - 4) 論文の言語は、日本語または英語とします。
- 応募締切 2015年9月30日必着(郵送・宅配便の場合は消印有効)

詳細は、以下のURLをご覧ください。

[http://www.jusoken.or.jp/commend/paper\\_gaiyou\\_2015.html](http://www.jusoken.or.jp/commend/paper_gaiyou_2015.html)

## 第43回住総研シンポジウム開催

平成27（2015）年度重点テーマ「受け継がれる住まい」連続シンポジウム第2回  
『受け継がれる住文化』



第43回住総研シンポジウム  
東日本大震災復興支援事業

# 受け継がれる住文化

和の住まい・和の住生活  
受け継がれる住まい vol.2

会場 和敬塾本館  
(旧細川侯爵邸)  
東京都文京区目白台 1-21-2

2015年 10月9日(金)  
見学会 11:00～12:00 / 講演会 13:30～17:10  
参加費：見学会 1,000円  
講演会 一般 1,000円 学生 500円  
定員：見学会 20名 講演会 70名 (共に先着順)

見学会講師  
趣旨説明：内田 青蔵 (神奈川大学 教授)

講演：竹原 義二 (無有建築工房 主宰)  
「和の住文化の継承とその実践」  
木村 忠紀 (株式会社木村工務店 代表)  
「棟梁から見た伝統建築の魅力と継承」  
梅本(切原) 舞子 (千葉大学大学院 特別研究員)  
「床上文化と和の継承」  
碓田 智子 (大阪教育大学 教授)  
「伝統建築文化と住教育」  
コーディネーター：松本 暢子 (大妻女子大学 教授)

主催：一般財団法人 住総研

和の住生活の基本となる和室や床座を中心に、この継承の問題を掘り下げてみたい。すなわち、伝統性の継承の問題の所在を端的に示す一例が、和室離れや床座生活離れの現象ではあるまいか。豊敷きて床の間を備えた和室や襖・障子の建具、あるいは廊と連続する開放性といった空間特性、また、こうした床座を基本とした生活スタイルの中で生まれた伝統的生活技法といったものが、今後のわれわれの生活の中でどう継承されていくのか。豊ひとつを取り上げて、豊敷の減少から豊の需要は減り、イグサ生産の産業は縮小化され、人工的な化学豊へと移行せざるを得ない状況をどう受け入れたいべきかといった様々な問題へと波及していく。このことは、伝統の継承の意味を考えさせる。伝統的形式を守ることと同時に伝統を死んだものとせず、生きたものとして現代に則したものに発展させることも継承のひとつの形であるように思うからである。和の住文化の継承の問題は、深く複雑であるが、拡散することなく議論できればと考えている。

内田 青蔵  
神奈川大学教授  
受け継がれる住まい調査研究委員会委員長

日時：2015年10月9日(金) 見学会11:00～12:00/講演会13:30～17:10

会場：和敬塾本館(旧細川侯爵邸) 東京都文京区目白台1-2-12

参加費：見学会1,000円/講演会：一般1,000円、学生500円

※参加費はすべて東日本大震災義援金として被災地にお送り致します。

定員：見学会20名/講演会70名(共に先着順)

※見学会は定員に達しましたので、キャンセル待ちとなります。

申込：以下のWEBフォームまたはFAX(03-3484-5794)でお申込下さい。

[http://www.jusoken.or.jp/symposium/sympo\\_form.html](http://www.jusoken.or.jp/symposium/sympo_form.html)

詳細は以下のページをご覧ください。

[http://www.jusoken.or.jp/symposium/jusokensympo\\_43.html](http://www.jusoken.or.jp/symposium/jusokensympo_43.html)

## 最近の行事より



2015年度研究助成  
キックオフミーティング  
交流会の様子  
(4～5頁参照)



図工教室の様子  
(9頁参照)

編集後記：毎年8月も終わりに近づくと、夏休みの宿題に関して調べる人が増えると言われます。ネット上でも自由研究に関する情報が沢山流れていました。9頁でも報告しているように、住総研では今年も主に小学生を対象にした図工教室を行いました。お陰様で好評のうちに終了しました。私が子供の時は工作を自由研究にした記憶がないのですが、日常生活で目にする牛乳パックやペットボトル、割り箸、段ボール等で色々な作品ができるのだなあと改めて感心しました。また、作った後に参加者全員の作品を街に見立てたセットに並べて記念撮影をしている時の子供達は楽しそうでした。残り僅かの夏休みの思い出の一つになれば幸いです。また、少しでも家(づくり)に興味をもってもらえるきっかけになればと思います。参加者からは「楽しかった」、「勉強になった」との意見が多く寄せられました。住総研では住教育の一環として今後も子供向けのイベントを開催していきたいと思えます。(K)

## 住総研だより 第22号

発行日 平成27(2015)年8月31日

発行人 道江 紳一

発行所 一般財団法人住総研

〒156-0055 東京都世田谷区船橋4丁目29-8

電話 03(3484)5381

FAX 03(3484)5794

E-mail [jusoken@kpe.biglobe.ne.jp](mailto:jusoken@kpe.biglobe.ne.jp)

URL <http://www.jusoken.or.jp/>

住総研は「住まい」に関する研究助成事業を中心に、「住総研研究論文集」等を発刊、また住に関する専門図書室、シンポジウム・セミナーの公開開催など、社会の役に立つような事業につとめています。

この「住総研だより」は、当財団の活動を研究者、市民の皆様により広くご理解頂くとともに、意見交流の場になることを願って配信します。ご利用宜しく願い致します。

「住総研だより」編集担当